

「追憶の水輪」 中島 讃良

初富士を正客とせんティータイム

禅林の残る蟬穴淑気満つ

藁灰の端正な嵩春火桶

点滴を音と記憶す春の暁

地球儀に上下ありけり四月馬鹿

黄昏の足踏みしたる花明り

嬰の瞳まだ雲をとらへず絮たんぽぽ

余花白し山のひかりをあつめては

流木として長き日々梅雨に入る

今を生きる確かなかたち蟻の列

ガラス器の音のいろいろ夏料理

水打って土の正気を戻したる

熱砂踏む足裏一瞬闇のごと

向日葵は長き看取りの終の花

鳥葬の鳥を選りをり夏の夢

白日傘外に使ひし顔入れて

風鈴の音は金色南部鉄

夏風邪の味蓄の錆や薄荷糖

処暑の日の背広は男の戦闘服

しっかりと食べて秋思と言ふ女

星月夜をとこの夢の尾鰭かな

打ち始め魚板の窪の冬陽飛ぶ

革ジャンの屈折したる若さかな

白樺の白を骨とし山眠る

父の忌や煮凝り出来ぬ土地に嫁し

孫もゐて雪遊びする野辺送り

桜までさくらまではと雪に逝く

捨て傘の赤は枯野の痛みかな

立冬の根のあるものの起ちし影

天に根を張りたるごとく枯木立